

交通を中心に「公」の意味を考える

加藤一誠

商学部 教授

自ら研究テーマを設定し、理論と実証両面から分析する。そして、政策的含意をもつ卒業論文を仕上げることを目標とします。

本年度に開設された研究会です。担当者の専門は交通経済学ですが、研究会では広く「公」の活動領域に焦点をあてています。

本稿の執筆時、ゼミ生は研究テーマの設定という産みの苦しみを味わっているところです。彼らには問題意識をもち、何を明らかにしたいのか、という視点を大切にして研究を進めてもらいたいと考えています。

また、多くの人が納得するためにはデータにもとづく分析も必要です。政策を論じるとき、わが国にデータがなければ、アメリカのデータを使って分析し、そこから含意を得てほしいと思います。

学生から提案されたテーマは広範囲です。首都圏空港のハブ性と今後の空港政策、少子高齢化時代に向けたインフラ整備の財源―『荒廃するアメリカ』から学ぶ、電力自由化政策の功罪―アメリカの州レベルデータから見えるもの、タクシー規制緩和の評価と今後の政策課題、航空と新幹線―モード間競

争と今後の展望、効率と公平からみた離島航空、地方空港の活性化、世界遺産登録の功罪、都市化に対する交通の影響といったものです。

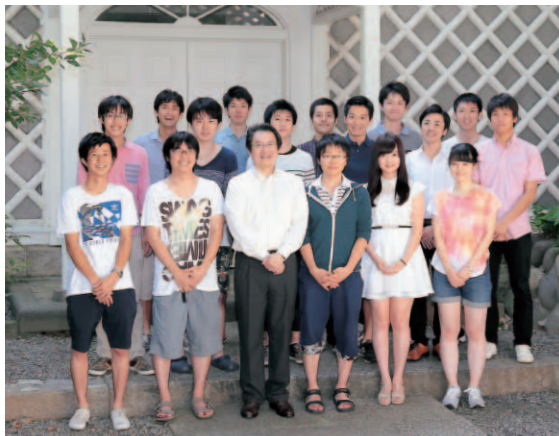
春学期の研究会では、理論と実証に関わる基本的なツールや見方を学びました。秋学期の研究会は、各人の研究状況の報告とディスカッションが内容となります。隣接領域を扱うメンバーがチームを組んで三田祭論文を書き、その後、個人の卒業論文を作成することにしています。この過程で研究テーマも若干修正されることでしょう。また、研究会は社会性を養成する場だと考えており、塾内外から講師を招いて話を聞き、積極的に現場に足を運びます。今年度は理論と実務を熟知した物流エキスパートの講演会の開催、航空会社・空港の視察などを予定しています。

建設的なディスカッションで研究を磨き、それ以外の時は楽しく。そんな雰囲気、ゼミの理想です。私はそんな雰囲気づくりをお手伝いしたいと思います。

1年目のゼミの魅力

かわい しゅん
河合 駿君 商学部3年

私たちのゼミでは、交通とアメリカという2つの領域から各自が関心のあるテーマを設定し、研究しています。大学で学んだことを単なる知識だけにとどめることなく、外部のゲストスピーカーをお招きして行われる講演会や現地視察を通して、社会の動きを自らの肌で感じ考える視点を養っています。ゼミ1期生として決められたことをただこなすのではなく、皆が何をすべきか考え、教授と一体となってゼミの活動の歴史を形づくっていく活気と気概にあふれた雰囲気が私たちのゼミの最大の魅力です。



好奇心を磨いて個性を育てる

リア充から非リアまで、温かくて爽やかな40人の仲間が集い、学部1年から大学院博士課程までの隔たりを忘れてユニークな発想を大切にしている研究会。

おがわかつひこ
小川克彦

環境情報学部 教授

小川研究会では、日常のさまざまなシーンを対象とした新たなメディアを実現するため、ユーザを中心としたメディアをデザインし、フィールド実験を通して評価し改良するヒューマンセントールドesignを実践している。

ただ、私の専門を聞かれても、どう返答していいのか迷ってしまうことが多くなってきた。というのも、研究会の多くの研究が既存分野でカバーできないからだ。

ここ2年間の主な卒論テーマをあげると、「雨の日を楽しくするファンブレラ」「犬目線による商店街ビデオ」「乙女ゲー…女性の疑似恋愛」「Twitterによるテレビ番組の視聴質」「マネキン漫才」「電車ラジオ」となる。

どうしてこんなユニークな発想の研究が多くなるかというと、①学生たちがやりたいことをやる、②どんなに小さなことでもオリジナルの研究をやってみよう、③困ったときには私が相談にのるといのが、この研究会の方針だからだ。さらに、これらの研究は大

学の中にとどまらない。国際会議や学会といったアカデミックな発表はもちろんのこと、さまざまな企業や行政とのコラボレーションを実践している。その結果として学会で表彰されたり、事業に導入されたりすることもある。学生たちの活動は実にダイナミックだ。

こんなことを何年もやっていると、自身の研究が何だか分からなくなる。でも、私はこんなCHAOSな環境が大好きだ。学生から学ぶことがたくさんあり、そのために楽しんでディスカッションできるし、いつも若い頭でいられる。

もっとも、学生たちが自分で問題を発見して自分で解決するというのは、SFCのパンフレットにも予備校の教材にも書いてある。私が卒業した工学部でも、指導教授に何をやってもいいと言われて、私は制御理論を志した。そして、その研究の面白さが現在にながっている。

時代も研究も変わったけれど、慶應義塾の学生たちにはそんな独立自尊の心を大切にしてほしいと思う。

皆がイキイキと問題解決をする研究会

もりしたえみり
森下恵美理君 総合政策学部3年

小川研究会の魅力は、全員がイキイキと研究していることである。皆が解決したい問題に真剣に向き合って、個性あふれる解決法を提案し実践している。それが実現する理由の一つは、研究会のモットーが「明るく楽しく元気よく(ATG)」であること。先生は「研究にならないものはない」と常におっしゃり、ものづくりの基本である「自分が本当に欲しいものを生み出す」ことを勧めてくださる。また、多種多様な経歴の持ち主が集っていることが挙げられる。グループでアイデア出しをする機会が多く、その度に1人では思いつけないような面白いアイデアが生まれる。これらの環境が学生の活力ある研究を生んでいるのだろう。

